

学力の基礎をきたえ どの子ども伸ばす研究会ニュース

NO. 357

学力研の広場

2024. 12. 8

学 力 研 発 行

常任委員長 岸本ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

全国各地で、教員採用試験の倍率低下が起きていることが、たびたびニュースになっています。例えば、秋田県では小学校教諭の採用試験の最終倍率が1.1倍となり、過去最低を更新したとのことです。学校現場のブラックさが大きな話題となったことで、教師が不人気職になりつつあるのは、この仕事が好きで日々がんばって仕事をしている私たちからするととても歯がゆいことです。

一方、心身を病んで休職したり離職したりする先生の数も、増加の一途をたどっています。しかし、そうして欠員が生じても補充されることがないため、人手不足に陥っている学校が多いようです。

そんな中でも教師に求められる役割は軽くなることはなく、「令和の日本型教育の担い手」として要求される資質・能力はむしろ多様さを増しているため、若い人たちが教師になろうとしないのも、無理からぬことなのかもしれません…。

このような時代にあって、私たちが「教師」であり続けるためには、一体何が必要なのでしょう。大きなテーマですが、一度立ち止まって考えてみる必要があると思います、特集しました。(堀井)

CONTENTS

◇特集 教師であり続けるために◇

「こだわる」ことでもっと楽しく柔軟になれる	吉田雅直	2
教師であり続けるために	十川瑠都	4
教師であり続けるために～大事なことは、全部子どもたちが教えてくれる～	岸本ひとみ	5
誇りをもって学級担任を続けられるように日々考えていること	鈴木基久	7
想像力で子どもの力を伸ばす	加藤英介	10

◇連載◇

「どの子ども伸ばす」を本気で考える75「意欲格差」に負けない! 公立小学校へ	岡本美穂	12
考える力をつけるための授業の組み立て方⑩ワンテンポ置くことで考えさせる	荒井賢一	15
社会科(歴史)授業力アップ講座②指導法研究⑤	深澤英雄	17
先生のための学校 誌上開校	久保 齋	19

第4回「先生のための学校」の報告	吉田雅直	21
------------------	------	----

局長・常任委員長だより		23
-------------	--	----

学力研カレンダー		24
----------	--	----

「こたわる」「ことでもっと楽しく柔軟になれる

大阪 吉田雅直

私が「教師であり続ける」ことができたのはひとえに学力研のおかげです。それは教育に「こたわり」を持つことの大切さを教えてくれたからです。「こたわり」を持つことで、

今日の前の子どもたちにとって何が必要で、何が必要でないか、自分の頭で考え、自分の信念に従って判断することができるようになります。保護者に対しても、学級づくりや学力づくりについて自信をもって話ができるようになり、信頼を得ることができるようになります。「こたわる」ことで、創意工夫が生まれ、授業が楽しくなります。「こたわり」というぶれない軸を持っていることで、上から次々と下ろされてくる「流行」にも柔軟に対応することができるようになります。

私の「こたわり」はたったひとつ。それは「どの子も伸ばす」ということです。言葉にすると簡単ですが、「どの子も」ということも「伸ばす」ということも、実現することはとて

も大変なことです。しかし、「どの子も伸ばす」という「こたわり」を手に入れたことで、私の教師人生は大きく変わりました。

「どの子も」伸ばすというこたわりは、公立小学校の教師として当然もっていなければならぬ感覚ですが、学力研に出会う前には決定的に欠如していました。「どの子も伸ばす」ということは、「できないことを子どものせいにはしない」ということです。つまり、教育とは授業で「教える」ことで完結するものではなく、「どの子もできるようにする」ところまでが教師の責任であるという覚悟を決めるということなのです。これは「教師の仕事は教えるところまで、あとは子どもの努力しだい」という自己責任論とは、きつぱりと決別するということなのです。

この発想は「働き方改革」に逆行するようですが、むしろ反対です。どの子も伸ばそうとする豊かな教育実践が、しんどい子だけで

なく、できる子の学力も引き上げ、子どもたちが自信と意欲にあふれてきらきらと輝き出す。これが学級を変え、保護者を変え、教師を変え、学校を変えていくのです。これがこそが真の「働き方改革」なのではないでしょうか。本来、一番手をかけなければいけないところで「効率化」という名の「手抜き」をし、学力不信を子どもたちや親のせいにする「働き方改革」に未来はありません。

「どの子も伸ばす」というこたわりは「みんなだ」というこたわりにもつながります。習熟度別授業やタブレットによる個別学習が進められる中で「みんなだ」取り組むことで生まれる教え合いや学び合いの豊かさが教室からどんどん失われようとしています。「教え合い」というと、できる子ができない子に教えてあげるというイメージが強いかもしれませんが、それだけではありません。「できない」と思われている子の何気ないつぶやきや素朴な疑問が、授業を深めるきっかけになることがあるのです。これは習熟度別の均質な集団では決して起こりえない現象です。つまり、「できない子」にとって「できる子」が必要である以上に、「できる子」にとって「で

きない子」の存在が絶対的に必要なのであり、この多様性こそが「集団の教育力」なのです。私は「どの子も伸ばす」というこだわりを持たなかったからこそ、その力に気づくことができた。そうでなければ、習熟度別授業や「個別最適化」の流れに対しても、なにも考えずに流されてしまっていたことと思います。

子どもたちの学びは、一斉授業の中で、友だちの意見に思考を刺激され、自分の意見がみんなをかしこくするという体験をつみ重ねていくことで深まっていきます。それを支えるのは「どの子も伸ばす」という教師の覚悟であり、「教室はみんなでかしこくなる」ところ」という教師の「こだわり」なのです。

「どの子も伸ばす」「伸ばす」ということも私にとって大切な「こだわり」です。子どもたちは勝手に「伸びる」ということはないので、「伸ばす」ためには教師の側に「きたえる」という発想が必要になります。教師の仕事は「教える」から「きたえる」にシフトすることで、日々の授業や教育活動が大きく変わりはじめます。「きたえる」というと厳しいイメージがあるかもしれませんが、実践してみると、子どもたちはみんな「きたえられたが

っている」ことがよくわかります。子どもたちにとって「できなかったことができるようになる」こと「自分の成長を実感できる」ことは、大きな喜びなのです。この「きたえる」ことにこだわった実践において、私が大切にしていることは「さかのぼること」「続けること」として「進化させること」です。

「さかのぼる」とは、スタートラインをそろえることで、格差を解消するということです。どの学年でも子どもたちの学力には大きな格差が存在します。そのまま新しいことに取り組めば、格差はどんどん広がり、できない子は「伸びる」前にやる気を失ってしまいます。そこで、事前に実態調査を実施し、苦手な子には個別指導を行ってスタートラインをそろえておきます。こうすることで、どの子も安心して自分を伸ばすことができるようになるのです。例えば、一年生なら「くり上がり」の前に「いくつといくつ」が全員できるか確認します。高学年であっても、必要に応じて、かけ算・わり算からたし算・ひき算まで「さかのぼる」ことを大切にしています。

どんなにすぐれた取り組みも「続ける」ことができなければ意味がありません。そのた

めには、まず、教師にとっても子どもたちにとっても「無理のない」取り組みであることが大切です。欲張りすぎると、準備や時間的な制約で続けることが難しくなってしまう。短時間でも毎日確実にできることを「ずっと続ける」ことが大切です。私はなわとびを体育の時間の準備運動として四月から一年間続けます。なわとび月間だけでは「どの子も伸ばす」ことができないからです。どうしても鍛えたいことがあれば、無理なく続けるシステムづくりはそんなに難しくありません。

「進化させる」とは、子どもたちの成長に合わせ、更なる成長を引き出す形で、続けてきたことを質的に変化させることです。私は毎日感想カードを書かせているのですが、はじめはたくさん書けることを評価しますが、自分の気持ちや友だちのことを書けること、ひとつのことを詳しく書けていることなど、子どもたちの様子をみながら少しずつハードルを上げていきます。それは、ここまで書けるようにしたいという「こだわり」があるからです。これからも「こだわること」にこだわりながら、無理なく、楽しく、柔軟に、教師を続けていきたいと思っています。

教師であり続けるために

十川 瑠都（兵庫県）

私は、教師七年目。（淡路島での非正規職員の時を合わせると八年目。）尼崎市で働き始めた二年目は、任されていることと自分の力量との差を感じ、「しんどい、こんなことをずっと続けられるのか。」という思いをもつことがあった。何か学級で問題があるというわけではないのに、比べられている気がして、職員室を出て教室に行くことが怖く感じることもあった。しかし、今はそう感じることはほとんどない。その大きな理由の一つが、自分を受け入れてくれる場所が学校以外にもあることである。

時々、SNSで学校現場での不満や悩みを打ち明ける教師をみる。匿名のつぶやきではあるが、中には動画で、苦しい現実を大声で叫んでいる先生もいて、周りが受け止められないのかと悲しい気持ちになる。中には、家庭、仕事、趣味とはつきり住み

分けて、仕事の仲間とは腹を割って話すという機会をもたないようにしている人もいる。色んな価値観の人がいて、その方が心地よいという人がいるのはよく分かる。しかし、自分とはどんな人間か知っていない人と働くことは、安心できないし楽しくない気がする。また、今、社会で働いている大人の中で、家族と職場以外につながりを持つている人は少ないのではないかと考える。近所付き合いの希薄さ、生活の苦しさ、当たり前の転職社会。そういった中で、遊びはどんどんなくなっている。

私が、職場で自分から話をするようになったのは、自分の意見を伝えてもよいと分かったからだ。上手いかないことを話して、支えてもらおうと考えられるのは、「誰だって上手いかないこともある」と分かったからだ。そう分かるようになったのは、

学校でも学校以外の場所でもたくさんの先生たちの話を聞いてきたことが関係していると感じている。

私の誇りは、居場所がたくさんあることだ。家族、学校、友だち、組合、中学生から続けているキャンプリーダーの活動、学力研。何か話せば笑い話にしてくれたり、真剣に自分の経験を語ってくれたり、頼もしい仲間がいる。教室には、私の目を見て話を聞き、「かしこくなりたい」と願っている子どもたちがいる。先生としてではなく、一緒に遊んでくれる友だちがいる。そのことも、上手いかない自分を支えてくれていると感じる。

教師を続けるためには、いい授業をするために勉強をやめないことや、驕らず子どもにせいで受け止められる力や、健康に過ごす生活も大切である。でも、私にとって、仲間と過ごすことが、「自分はこのままでいい」と教えてくれている。そして、もっと良い教師になりたいという気持ちを育ててくれている。

教師であり続けるために

「大事なことは、全部子どもたちが教えてくれる」

加印いろえんぴつ 岸本 ひとみ

○45年と半年

学級担任でなかったことは、1回だけ。つまり、今年で44回の学級担任を務めています。私の取柄は「じょうぶで長持ち」です。それでも、何度か危機がありました。その都度、何とか乗り切れたのは、担任している子どもたちの笑顔に励まされたからです。

学校教育の変わり目だとか、その子なりにととか、評価の視点を変えなければとか、令和型教育とか、いろいろ猫の目のような教育施策が出てきます。確か、数年前の流行は「個別最適化」だったような気がしますが……。

○「できたよ」「わかったよ。」

どの学年の子どもたちでも、学習を楽しんでいる時には、最高の笑顔を見せてくれます。特に、小学生の場合、できることと

わかることが一致しないことも多いので、できることを優先させる方が、モチベーションが続きます。

高学年になって初めて、理解と習熟とが分化していく領域も出てきます。中学年までの子どもたちにとっては、学校に来て、友だちといっしょに学習して、お互いに見えるようになってきたことを認め合いながら成長していくことが、すべてでしょう。

端的な例は、体育です。ひとつの技ができた時の、子どもたちはじけるような笑顔と、コツを教えたがる様子を見ると、学校ってこのためにあるのでは、と感じます。

その「できた」という充実感を、毎日味わわせることができれば、学校に来ることと集団で学ぶこととの意味は、自然にわかってくるはずですよ。

○学力研実践のシンプルさ

令和型の学習で求められるのは、高度な教師としての技です。学級づくりがうまくいっていないのに、子どもが先生になって授業をしても、意欲的なのは、先生役ができるだけの力のある子どもたちだけです。そんな子どもがごろごろいる学級なんて、なかなかないでしょう。つまり、学級づくり名人だけが、そんな授業方法を取り入れれば成功できるのです。

学力研実践は、その逆です。教師主導ではあるけれど、子どもたちの達成感や成就感は、ピカ一です。日本の伝統的な「読み書き、計算」を基礎として、クラス全員が参加できるようなスマールステップを用意し、コツコツやれば、どの子も伸ばすことができます。

マス計算がよい例です。

- ・ 10マス計算から50マス計算へ
- ・ 絵になるマス計算
- ・ 左利き用マス計算
- ・ 真ん中に数字ありのマス計算

+	2	5	3	7	0	8	4	1	9	6	+
7											7
5											5
10											10
2											2
6											6
+	2	5	3	7	0	8	4	1	9	6	+
4											4
9											9
1											1
3											3
8											8

視線移動の苦手な児童用

+左利き用

それぞれ、困り感のある子どもへの対応や、速くできた子への配慮を基に考案されてきたものです。これらを、自分の学級の実態や、発達段階によつて組み合わせたり、使い分けたりして、実践していきます。

ただ、計算を繰り返しているだけに見えますが、これが脳の働きを促すのではないかとこの仮説は、毎年子どもたちの成長ぶりを見ていて、仮説ではないと実感しています。

最初はよたよたして間違いだらけでも、練習を重ねれば、必ずできるようになります。成功体験の積み重ねが大切と考えてお

られるのであれば、ぜひ、実践の第一歩として、このマス計算を経験してみられることをおすすめします。

そして、この実践は、誰でもできることと、どの学年でもできるというシンプルさを兼ね備えています。高度な技量が求められるわけではないところが、令和型の対応に位置していると言えます。

○素読もまたよし

年令やキャリアには関係なく、シンプルな学力実践を展開していれば、子どもたちの成長ぶりは手に取るようにわかります。音読もマス計算と同様、簡単で、誰でもできる実践です。出会った時は、音読がただどしどしかつた子どもたちが、練習を重ねること、はつきりした声、自信のある声に変わっていく、しまいには顔つきまで変わっていきます。

国語だけでなく、算数、社会科、理科、家庭科、保健、音楽など、どんな教科書でも、毎日、はつきりした声で音読させるといいのです。

教材研究のための時間がないときや、自

分の苦手な題材の時も、この手で切り抜けることができます。教科書があればできるので、実にシンプルです。

○ブラックの対極???

鈴木基久さん考案の「読み上げ漢字」も、子どもたちは大好きです。書き取りしなくても、ただ音読するだけでいいのですから子どもたちの笑顔が増えることを追究していけば、先生方の負担もかなり軽減すると思います。

子どもたちがどんな反応をするのが、その実践を評価するすべてだと思います。学級のうち、どれだけの子どもたちが、楽しんで参加できているかが、判断基準です。生活科や総合的な学習や、個別最適化や、令和型や、いろいろと提案はされてきましたが、難しいことは横に置いて、子どもたちの笑顔を基準に、実践を選んでいけば、毎日、お互いに機嫌よく過ごせるでしょうし、ブラック職場と言われることもないでしょう。この仕事、やりがいもとても大きい、楽しい仕事です。

誇りをもって学級担任を続けられるように日々考えていること

鈴木基久

コロナ禍の前、現行の学習指導要領の移行期のころから、教育改革のスピードがそれまでよりも格段に上がり、次々と新しいことが導入され、その対応に追われているように感じる。これまでなかった新しいことや仕組みが導入されると、それを使うことが求められ、それまで行ってきたことが古いものとされてしまう傾向がある。

しかし常に新しい物を追いかけるだけでは、これまでの学校（先生方と子どもたち）が築き上げてきた日本の学校の価値あるものを失うことになる。つまり、新しいか古いかではなく、どれがより本質的なのか、人間の成長に必要なものなのかを見極める力が、教職員一人一人に求められる時代になったと感じている。

「何のために学校はあるのか」などの哲学的な問いについて、みんなで議論することが必要だと考える。

学力研には、教職経験40年以上の先生方がたくさんいる。学習指導要領の改訂を現場の教員として何度も経験された先生方だからこそ分かる本質的なものを見極める目、強い信念がある。久保先生から「権能」のお話を聞き勇気づけられた私は、令和4年度の校内研修の資料として次の文章を配布した。

誇りをもって働くための

元氣が出る3つの言葉

①教員免許状をもって仕事をしている私達には、権能がある。

権能…ある事柄について権利を主

張・行使し得る能力。多く法

律上認められている権限についていう。

権限、職権…ある物事をするのできる資格。権利。

つまり、どのように指導するかは授業者の裁量に任されている。自分の構想を大切にしよう。

②働き甲斐があれば、頑張れる。

次々に打ち出される方針にふれまわされるだけでは、へとへとになってしまう。目の前の子どもたちの実態を踏まえた効果的な指導を構想し、実践し、振り返り次につなげることが、教員としての成長とやりがいにつながる。

労働Ⅱ構想→実践→評価（手応え）

構想が自分の構想でなくてはダメ。他人が決めたことを実践するのは、構想を奪われた状態である。自分の構想で実践し、自分で評価できれば、前向きに頑張れる。

③私たちは、「現場のプロ」である。

目の前の子どもたちを伸ばすために、今、何が必要なのか、次は何を

すべきかを取捨選択できる。(運用方法や内容の扱いの程度を決める) 裁量が認められている。〇〇教育の専門家はその道のプロ、研究者であって、理論に齟齬が起こらない提案をしている。でも、それを完璧に行うことにどれほどの労力がかかるかを考えていない。教育改革の波に飲み込まれて溺れてしまわないように、受け身にならずに仕事を行っていくためには、次々と押し寄せる波の正体と背景を知り、対応していくためにも教育について幅広く情報を得て考える研修の機会が必要である。

最近、教員の世代交代が進み「授業スタンダード」によって教員や児童生徒の授業中のやり方や受け方を統一しようということが広く行われている。教職経験が少ない教員でもある程度の授業ができることを目指していると思われるが、一方で弊害も指摘されている。「教員に対し同じ指導を求めることは、教員の専門職

性の解体につながりかねない。」という指摘は、「①教員免許状をもって仕事をしている私達には、権能がある。」ということが重要であると認識している人にしかできない指摘だ。行き過ぎた「授業スタンダード」は児童生徒だけでなく教員への管理を強め、教員の裁量を奪っていくものだということを教員自身が自覚しなければならぬと思う。

授業スタンダードで方法を縛るのではなく「子どもの実態に合わせた教育をするために学級担任がいる。」というスタンスで臨むことが重要だ。教育改革を進めるときに大切なことは、子どもの実態に合わせるということではないだろうか。幼児教育、小学校、中学校、高等学校の発達段階に合わせた方法や内容であることはもちろんだが、同じ学年の子どもでも実態はそれぞれの学校で異なる。同じ学校の同じ学年でも、これまでの学習の積み上げ方やメンバーが違っているので毎年実態は変わってくる。そ

れなのに「個別最適な学び」をしなければならぬ、「自由進度学習」をしなければならぬと教育委員会が縛りかけるのは、「子どもの実態に合わせた教育をするために学級担任がいる。」というスタンスに反するのではないかと思う。目の前の子どもの実態を一番よく分かっている教員が、どんな手順で、どんな方法で、どんな内容で授業を構成していくのかを考えるとところから、教育改革は始まるべきだと私は考える。そうなれば、それぞれの教員の裁量を生かした実践ができ、専門職性が守られることになる。結果、教員としての成長ややりがいを感じることができ、誇りをもって教員を続けられることになる。

最近、気になっていることにこれから導入される「デジタル教科書児童用」がある。例えば国語科のデジタル教科書児童用には、教科書の教材文の後の「学習の手引き」通りに授業が進められるようにワークシー

トなどがすべてそろえられている。「導入された児童用デジタル教科書を使いましょう。」となると、授業内容まで縛られてしまい、これまでに蓄積された児童の実態に合った効果的な指導方法や内容が使われなくなってしまう、失われていくことになる。

私たちの授業実践はライブなので、どんなすぐれた授業であっても映像やレポートとして残していかなければ失われていく。先人の作った素晴らしい教材も、使う人がいなければ忘れ去られていく。

だから私は、先人の知恵が生み出した価値のある実践をまねして自分のものにしていきたいし、教材も使っていきたい。そのことがさらに若い先生方にそれらを伝えることになるのではないかと思っている。

先日、4年生担任にわり算の筆算の教材「わり算忍者」を紹介した。とても教えやすくて子どもたちにも好評だったという感想を聞いた。「わ

り算忍者」は山口県の大達先生が開発した教材で、大達先生が開発した教材には素晴らしいものがまだまだある。それらを使い続け、継承するのも学力研の使命だと思っている。

気になる映画紹介

「小学校 ～それは小さな社会～」

公式ホームページより抜粋

はじめに

イギリス人の父と日本人の母を持つ山崎エマ監督は、大阪の公立小学校を卒業後、中高はインターナショナル・スクールに通い、アメリカの大学へ進学した。ニューヨークに暮らしながら彼女は、自身の“強み”はすべて、公立小学校時代に学んだ“責任感”や“勤勉さ”などに由来していることに気づく。

「6歳児は世界のどこでも同じようだけれど、12歳になる頃には、日本の子どもは“日本人”になっている。すなわちそれは、小学校が鍵になっているのではないか」との思いを強めた彼女は、日本社会の未来を考える上でも、公立小学校

を舞台に映画を撮りたいと思った。

1年間、150日、700時間に及ぶ撮影と1年を要した編集を経て完成した本作には、掃除や給食の配膳などを子どもたちが自身が行う日本式教育「TOKYOISE (特活)」——いま、海外で注目が高まっている——の

様子もふんだんに収められている。日本人である私たちが当たり前にやっていることも、海外から見ると驚きでいっぱいなのだ。

いま、小学校を知ることは、未来の日本を考えることだ、と作品は投げかける。



想像力で子どもの力を伸ばす

加藤 英介

一冊の絵本から感化

「このよで いちばん はやいのは」という絵本をご存知だろうか。さて、この世で一番速いものはなんだろう。カメラよりもウサギ、ウサギよりもチーターが速い。海にはチーターよりも速い魚がいる。もっと速く飛ぶ鳥もいる。新幹線やジェット機なども。さらに、光という意見もあるだろう。作者が考える速いものはタイトルにも書いてある「想像力」である。人が感じた瞬間から想像が始まる。そして、未来予想図を思い描き、現実となっていく。教師という仕事に置き換えてみる。今や教材も学習方法もあふれている。学校に行かなくなつて勉強はできる時代。教師なんて必要なのだろうかと思う人もいるだろう。ただ、どれだけ優れた教材や学習方法があつたとしても、一人ひとりが自分に合った学習方法や学習方法、新たな発見を一人で取り組むに

は相当な時間と労力を要する。途中でくじける子もいるだろう。一人ひとり必ず壁にあたるときがくる。そんなとき、子どもたちはどうするだろうか。ユーチューブやタブレット、仲間や友達などあらゆる手をつくせる子もいれば、何もできずひきこもってしまう子もいる。解決したとしても一筋縄ではいかないだろう。これは、学習に限ったことではない。普段の生活の中でも同じようなことが起こる。問題があつたときに、その子を一番速く救えるのは教師である。4月からずっと過ごしているからこそ、見えてくる問題の裏に隠されている真実。世界で一番速い想像力を使いそれを読み解くことできる唯一無二の存在は教師しかないないのである。具体例を紹介する。

ムードメーカーAくん

現在4年生を担当している。クラス

の人気者でもあるAくんはひょうきんでみんなのムードメーカーでもある。しかし、言葉が荒かったり手が出てしまつたりと課題も多くあつた。「○○しなさい」といっても聞いたふりをして取り組まない。そんな子に対して、みなさんはどのように対応するだろうか。その子との関わりで心に決めたことは「できる可能性を信じて待つ」である。言うのは簡単だが、実際に現場で起こる様々なことに対して待つことは容易いことではない。

友達の言葉を勘違いして受け取り、殴つてしまう。話をしても聞いてもらえないから強く言葉を言つてしまう。登下校中に、石ころを蹴つて車を傷つけてしまう。授業中に、おもしろいことを言つてみんなを笑わせようとする。これらの出来事に対してどのように声掛けするのか。2つのパターンで考えてみる。

A いけないことを伝えて、終える。

B 理由を聞いてから、いけないことを伝えて終える

Aは、教師でなくても伝えることはできる。ルールだから守りなさいと一方的に伝えて終えているからである。これで、守ることができたのなら教師は必要ない。Bは子どもの理由を聞いてから伝えているため、事情を察しながら進めることができる。ここで考えを改めて次の行動に活かせる子は多いだろう。しかし、強者もいる。今回のAくんがその強者だ。

では、どうしたのか。それは、今までAくんが4月から取り組んできた成長をストーリーに変えて話をしたのである。9月、専科の授業中にさわいでもわりに迷惑をかけてしまったときのことである。直後の休み時間に呼び出して話をした。

「Aさん、なぜ呼ばれたのか分かりませんね。じゃあ少しだけ話をしてもいいかな。先生は、4月Aくんとお会って、うれしいことがたくさんあったんだ。元気よくあいさつしてくれる、給食のときには先生の給食を片付けてくれる。」

牛乳がこぼれたときには誰よりも先に拭いてくれました。掃除は隅の方のゴミを丁寧にとっていたよね。国語の授業のときには、書いていなかった汚いノートが急にきれいになって、振り返りで1ページ書いていたよね。もちろん、うまくいかなかったときもあるかもしれないけれど、先生はAくんがかしこい人だと知っているよ。そんなAくんに質問です。今日の自分をどう思うかな。」

すると、Aくんは怒りの感情がだんだんとおさまり、吊り上がった目はおだやかになった。「ぼく、あやまります。なおします。」という言葉とともに「これから、がんばります。」と伝えてくれた。その目はいつも以上に真剣で変わった。その目という気持ちであふれていた。そろそろという気持ちであふれていた。それ以降、Aくんは、授業中もふざける発言ではなく仲間を助ける発言に変わり、教師が困っているときにも助けられるようになった。

このように、Aくんの成長を話すことにより、先生に呼ばれて怒られると

いうマイナスイメージから先生に怒られるけど直したくなったというプラスのイメージに変えることができる。出来事は同じでもAくんの本当のよさを知り、伸ばしていくことができるのは教師しかいないのである。

だが、今回のように成果が出るときもあれば成果がでないときもある。子どもの可能性を広げられる先生でもできないときはある。だからこそ、学校には多くの先生がおり、多くの目で児童を見ている。目の前の子どもを伸ばすためにさまざまな個性をもった先生が必要なのである。そのときどきの状況に応じて、臨機応変に対応を変えていかなければいけないこの仕事は、ICTでは代用できない。子どもたちが本当に困ったときに、一番身近な存在である教師が、世界で一番速い「想像力」を使って、その子に伝えたいことを伝えていくことが必要とされているのではないだろうか。あたたかくも守りながら、成長していくための声掛けや指導を自分自身も大切にしていきたい。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

困難な教室で、教えることには

どんな意味があるのか②

■6年生でも百マス計算を行う

意味はあるのか？

よく聞かれる言葉です。皆さんはどうお答えになりますか。大人から見れば「既習課題を解く」のだから、百点は当たり前」と思われるかもしれませんが。しかし、子供にとっては問題の内容よりも「全部できた、やった！」という「感動の喜び」の方が、はるかに大事なのです。百点を取り続けること、勉強は楽しいものになっていきます。また、短時間で集中して一気に仕上げることで、学習姿勢も身につきます。こうして、コツコツと学習を続けるうちにできるようになっていきます。

算数で一番大切にすべきこと、それは「できる」という実感です。これが「習熟の喜び」となります。他の教科に比べると、友

達との差も感じやすく、学年が上がるにつれて苦手だと感じる子供が増えていくものです。だからこそ日々の授業のなかでいかに「できる」という経験を重ねさせてあげられるか、が問われていきます。

勉強嫌いの子供でも、「やればできる」「もつとやりたい」と、自信や意欲が生まれてきます。「快脳教育」という本では「やる気」についてこのように書かれていました。やる気には4段階あり、

- ① やる気
 - ② やらされ気↓親や先生から指図されて嫌々机に向かう状態。
 - ③ やらん気↓同じくやらないけれども、主体性があって、今はやらない、と決める事。
 - ④ やれん気←全くやる気がなくて、何もしない状態。
- ということでした。勉強嫌いの子供というのは、「やらん気」であったり「やれん気」

の状態なのでしょう。そして、ここでもう一つ大事なポイントは、個人と集団の関係です。学力づくりで忘れてはいけないことは、個人の力でできるようになったと実感できることです。友達に教えてもらってできるようになったことはあくまでも「友達のおかげ」なのです。よく子供が「この問題教えて下さい。」と言うと、先生が「友達に教えてもらいなさい。」と言って、教えてもらったことでできたという場面を見かけることがあります。確かに子供はその問題ではできるようになっていますが、あくまでも友達のおかげなのです。ひどい場合は「先生は教えてくれなかった」という負の感情に変わるかもしれません。毎回「教えられる」「教える」という固定化された人間関係では子供は伸びません。教え合う、というのとはできない子供の上に立って教えてあげるといふ関係ではなく、一人ひとりが精いっぱい問題に向き合い、そこでお互い疑問を投げ合うことではないでしょうか。逆転現象のない人間関係では、必ず上下関係ができてしまいます。

読み書き計算を生活とやかに結びつけることができるのか。子供達が、「読み書き計

算」ができるようになった、その結果「人生が明るくなった」という経験となっているのか。日常生活が豊かになるための「読み書き計算」としていかなくはないけれども、「読み書き計算」ができたという「歓喜」を子どもたちに感じさせてあげられているのが大事です。

■頼りになるのは「お隣さん」

ある学級の国語の授業の様子です。その授業では、高学年であるにも関わらず、たくさんの児童が手をあげて自分の意見を発表していました。一人ひとりの発言も非常に長く、鍛えられた子供の姿でした。しかし、その映像を見ながら以前私が先輩の先生に言われた言葉を思い出していました。

その言葉とは、

「確かに一人一人は、発言が長いし、よく鍛えられている。しかし、これ以上は愛の問題や。愛がない。本当に聞いてもらおうと思ったら、もっとその子がつなぎ役になりながら、聞いてねと愛を持って発言できるようにしなくちゃいけない。」

とのことでした。その当時の学級では、話

す側の子供が、「言いたい、とにかく言いたい」となっていて、聞いてもらえるように発言者が気配りするような関係づくりができていなかったのです。それ以来、授業で子供がつながるとはどういうことかと考え実践するようになりました。

主体的・対話的と言われている現代において、対話的があくまでも、教材との対話・教師との対話レベルでしかないということはないでしょうか。確かに、活動レベルでいうと素晴らしいのですが、そこに子供の「話し合いたい、発信し合いたい」という想いがありません。つまり「共同」の意識がないということです。また、学級の雰囲気的には、みんなで追求しながら語り合っているように見えたのですが、そこに「あーわかった」という個々の意識・満足感はありません。

ここで、一斉授業での「話し合い」「交流」とはどのような価値があるのかについて考えてみます。斎藤喜博氏は、「私たちは、良い学級をつくるのか、教科の学習をおして人間関係を集団化するか、また前にも書いたように教材の教え方の研究をしたり、定石をつくりだしたりして、努力をしてい

るのです。そうでないと、お互いに助け合ったり、励まし合ったりする子供にはならないで、競争的で排他的な子供になってしまふのです。」(斎藤喜博全集巻1)と主張しています。競争的で排他的な子供、これはまるで今の社会を表しているようです。

だからこそ、まずは「合言葉」として指導したのが、「頼りになるのはお隣さん」でした。最初は教師としても隣の席の友達と相談し合ったら良いという感覚で使っていた言葉ですが、最近この言葉の意味を深く考えるようになってきました。お隣さんの頑張り「感動」できますか。お隣さんとともに努力できる喜びを子供達に語ってあげられていますか。それは学校の教室でしか教えられないものなのです。つまりお隣さんは世話係ではないということです。世話をするとした瞬間、学級は連帯責任を感じてしまう人間関係になってしまうのです。

一人ひとりが授業の中で「できた」という感動があり、それを喜び合える関係が必要なのです。そしてそれができるのは「一斉授業」だと考えています。

考える力をつけるための授業の組み立て方⑩

大阪教育サークルはやし 荒井 賢一

ワンテンポ置くことで考えさせる

教育実習生の研究授業を参観した。

「天までとどけ、一、二、三。」と言ったあと、みんなは何をしましたか。」手を挙げる子もいるが、指名されていないのに、

「ジャンプした」

と言ってしまう子がいる。実習生は、勝手に答えを言った子を注意するでもなく、

「そうだよね。」

と受けて、授業を続けていく。

指名を受けない勝手な発言を認めてしまうと、他の子どもたちの考える機会を奪ってしまうことになる。

「三十センチは、どのくらいかという」と

と言って、実習生は、三十センチの長さの紙テープを黒板に貼った。

もったいないことをする。

「三十センチって、どのくらいだと思いま

すか。手（両手）で、どのくらいかやってみよう。」

三十センチは、一年ならまだ習っていない。ならば、どのくらいか予想させ、考えさせた方がいい。

実際にやらせてみれば、子どもによっては一センチぐらいのはばを作ったり、メートルものはばを作ったりするだろう。

でも教科書では、「やっと三十センチ」と書いてあるので、一メートルはおかしいということに気付けるだろう。

「ほかの人も見てごらん。」

自分と他の子の三十センチ予想を較べさせることで、自分の正しいかどうかを考えることにつながる。

ある日の授業の導入

六年理科「変わり続ける大地」の発展授業として、「地震に強い建物」の授業をした。

最初に、「三匹の子豚」の絵を見せるのだが、その絵を提示する前に、「今からある物語の絵を見せます。何の物語か分かっても言っただけじゃありません。黙ってノートにその物語のタイトルを書きましよう。」と指示してから、絵を見せた。



こうしなければ、絵を見せた瞬間、「三匹の子豚だ」と

言ってしまう子が出るからである。

子どもたちに考える力をつけようと思うなら、考える機会を例え小さくても、日々の授業の端々で仕組んでいく必要がある。

絵を見て、その物語が何だったかを思い出すことを「考える」というかどうかは微妙なところかもしれない。ただ、人が物を考えるためには、これまで自分の中に蓄えられた記憶を引っ張り出す必要があるのも確かである。

当然、物語を全く知らない人は、記憶自体ないのだから、タイトルを書くことはできない。

一方、物語を知っていても、タイトルを思い出せない子もいるだろう。

また、タイトルを思い出すことに合わせて、どんな物語だったかとも思い出す子も出てくるだろう。

絵をたった一枚見せるだけでも、これだけの考える機会を子どもたちに与えることができるともいえる。

その日は26日だったので、出席番号26番を指名して、答えを言わせた。

【板書】三匹の子豚

「豚」という漢字を板書する前に、

「ブタを漢字で書いた人？」

と聞くと、どのクラスも一人か二人、手を挙げる。

「こんな字です。」と言ってから、「豚」

を板書した。

思い出した物語のタイトルを平仮名で書いてもカタカナで書いても漢字で書いても、その指示はしてないので、書く子の自由ではある。

そういう自由のある状態で、あえて漢字で書こうとする子は、やはり学力が高いと言えるかもしれない。

「簡単にあらすじが言える人？」

こういうのは、挙手指名で言いたい子に言わせていく。

豚の兄弟が母豚に家を追い出された話から始める子もいれば、簡潔に、わらの家も木の家も狼に壊されて、レンガの家だけ大丈夫だった、と事実のみを話す子もいる。「追加がある人？」

と聞くと、狼がレンガの家の煙突から入り、鍋の湯でやけどして湖に入るなども話す子もいる。

「では、この物語は、みなさんに何を伝えたいのでしょうか。」

要するに、**主題**を問うたのである。

これが国語の授業なら、全員にノートに書かせる場面だろう。

「さぼったらだめ。」

「家はしっかり造らなアカん。」

「こつこつ努力することが大事。」



この後、**子どもには思いつかない主題を教師が語る。**

これができるかどうか、授業の中では大切になってくる。

「わらの家も、木の家も、オオカミが吹き出す息で壊れてしまいました。でも、レンガの家は大丈夫でした。これは、台風や嵐にはレンガの家が強い、ということを言っているのです。」

この後、地震に強い家はどれかを問う。

一、予習

指導法研究①で、「予習として、想像図や絵図から分かったこと、疑問に思うこと、気づいたことをノートに書いてきて、発表させます。4月当初は、時間をかけて資料をどう見ていくかの指導をします。一人一人の書いてきたノートを見て指導したり、全員発表をさせたりもします。そして、子どもの実態に応じて変化させていきます。」と資料を読み取る力について書きました。

二、社会科における予習とは何をやるのか？

久保齋氏は、「予習展開による国語科授業づくり」の中で「予習を指導する方法は二つあります。一つは、教師が次の時間の中心課題を予習に出すという方法。もう一つは、自分で読み深め課題を見つけてくる

という方法です。この両方を教え、併用して一時間の授業を構成するというのが私の提案したい方法です。」と書かれて、「子どもたちに予習の力をつける場合、中心発問を予習にするという方法だけでは、予習をする子どもは育ちません。子どもに自由を与え、教科書を読んだときに考えつくさまざまな思いをどんどん出させることが必要です。そして、それをみんなにどんどん発表させるのです。当然この場合、玉石混濁、瑣末な思いもあり、課題がしつかりと把握されている場合もあり、瑣末だけれど主要課題に向かうヒントを含んでいる場合もあります。それをみんなで吟味していくのです。」

社会科（歴史）の場合は、大きく載っている資料（絵図、想像図など）ですが、国語で久保氏が言われている「子どもの思いや疑問・気づいたことをどんどん出させる

そのエネルギーが子どもを育てる」ということは、社会でも同じです。久保氏は、「予習と教師の中心発問の予習を併用していくと、子どもたちは少しずつ中心課題に近づく『一人読む深めの予習』ができるようになっていきます。」と言われます。社会科（歴史）の場合も、資料の性格を把握して併用が必要だと考えます。

三、資料の扱いの例示（一）縄文・弥生

		想像図①	想像図②
人物	服装		
	食べ物		
建物	建物		
	その他		
道具			
その他			

日本文教出版の歴史編一、大昔のくらしとくにの統一では、3ページのわたり、①「今から約5500年から4000年前の集落のようす（想像図）」②「今から約2000年から1700年前（想像図）」

が載っています。歴史の勉強のスタートです。

指導書には、①②で人物や道具、建物の違いについて気づかせて、表にまとめていきます。(前ページの表)

一時間目にいきなり、想像図①②を「比較」させ、「視点が6つ」もあるのは難しいと思います。私は、想像図①だけで一時間とりたいです。まずは、子どもたちに自由に気付いたことをノートに書かせます。

班で発表してから、全体発表させます。それを黒板に書いていきます。歴史の授業のはじめに気づいたことを発表するのは楽しいなど感じ、それを先生が黒板に書いて認めてくれることで意欲がてきます。授業としては色々と出させて発表させることを目的(ねらい)とすることもあります。

違う方法では、教師がより「ねらい」を持って、子ども達が出した意見を整理することがあります。

想像図①は「縄文時代」です。私は視点を3つ作りました。「衣・食・住」でまとめました。子ども達の発言の中に、「衣・食・住」に関連するものはぼ入っています。

意見を「衣食住」で分類していくので

もっと絞って授業することもあります。一時間で「衣・食・住」をすべて扱うことは無理があります。子ども達が一番興味をもつものを考えると「食」です。

「食」から見っていくとこの想像図は色々な発見があり縄文時代の本質にも迫れます。

四、資料の扱い例示(二)蒙古襲来絵詞

長篠合戦図屏風

歴史の中でも有名な二つの戦いです。この戦いは、蒙古襲来絵詞は絵巻物、長篠合戦図屏風は、その名の通り「屏風」になっています。教科書に載っている場面を見ると左右に分かれて、二つの軍が対峙しています。

この資料を扱う時は、久保先生が言う「教師が次の時間の中心課題を予習に出すという方法」をとります。「左の軍と右の軍はどちらが勝っていますか？」と中心課題を出し、予習で考えてきて、授業で発表し、理由を述べます。

長篠合戦図屏風の左側の織田・徳川連合

軍が勝利するのですが、この絵図を見て、勝利した作戦を考えさせます。子どもたちは、左側は、鉄砲をもって煙がたくさんあがっている。鉄砲の数が多い。柵をつくって待ち構えているなどの意見ができません。

ここで教師は、より深めるための発問を準備しておきます。右下にも煙がっている箇所があります。鳶ヶ巣山砦です。指導書の赤本には、「武田軍をおそう徳川軍」と書いています。徳川家康の家臣酒井忠次の大作戦で、鳶ヶ巣山の背後から砦を守る武田軍に対して奇襲攻撃したのです。

蒙古襲来絵詞には御家人竹崎季長が右に書かれて、左には集団で攻撃しているのが元軍です。ここでも、「どちらが勝っているか？」と問います。教科書の絵図だけを見ると竹崎が負けているようにも見えます。しかし、よく見ると、背中に矢が刺さり後ろを向いて逃げている元軍も描かれています。授業では、補足として、教科書絵図の右側左側の見せることで戦いの様子がより深く分かってきます。

「先生のための学校」誌上 開校

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋 2024 12

『統一の場』としての

授業自治と「コモン」としての学級

学級づくりを大きな立場でとらえなおす必要を提起します。授業を自治という観点から、学級をコモンという立場からとらえるのは新しい視点であると言えます。

授業をしているとき、子どもがいろんな発言をする。発言の中で自治的な感覚を持っている子と自治的な感覚が育っていない子がいる。

自発性と自治性とは違う。自発的な発言の中には、単に自分の意見を教師に認めてほしいだけで、それが学級の仲間に向かっての発言でない発言や、学級仲間への発言ではあるがそれが単に学級に自分の発言をぶつきたいだけで、自分の発言が学級の仲間には吸収され、化学変化をおこして何らか新たなアイデアを呼び起こすということを

全く意識も期待もしていないような発言もある。自分と自分の属する集団とのよりよい相互に生産的な関係を築こうという感覚とそれによって連帯観、帰属感を高めようとする感覚が自治の感覚である。

この自治的な感覚の萌芽は幼児期の小さな集団や授業外の仲間集団では自然的に発生する感覚であるが、学校生活の中では急速に退化してしまい、発展しないている。

しかし、この自分の考えを自分の集団に投げ込み、もみ合うことによって一人では行きつくことのできない優れたアイデアと仲間としての連帯感をクラスでも、授業でも手に入れることができるという感覚を獲得した学年の子どもたちは、クラスが変わり、学年が進んでもその感覚を忘れず発揮しようとしていたし、大人になってもその感覚を発展させて身近なところから社会をよりよく変えようとする。

この自治的感覚は人間本来のものであり、だれでも、いくつからでも、いくつになってももっているものである。学校教育はこの自治的感覚を発展させることもできるし、委縮させ死滅させることもできる。

私の問題意識は、学校教育のなかに自治的感覚を発展させ、なにかこの感覚を委縮させているのかを検証することである。

子どもがクラスを自分の集団として意識し、より高めるために、友だちを高め、自分自身も高めることにしようとするこの自治的な感覚は授業の内容的にはステップの4とか5の内容のように思われるが、その萌芽はクラスをもった瞬間からはじまる。

仮に4月のクラスが、ステップ1の「私語や立ち歩きなく授業がうけられる」というところをめざした実践である場合。

100マス計算をする。立ち歩く子がいる。教師は「立ち歩いたらみんなに迷惑でしょう」と説得するか、「やらないと自分のためにならないよ」と諭すかが一般だが、子どもたちは真実を見透かして「できないから立ち歩いてはるのやで」とか、「〇ちゃんができるようになるまでタイム測るの

止めとこ」とかいいます。

子どもは子どもに対して強制力をもたない。だからじゃまだからとはいわないで親身になってアイデアをだす。このような時、教師が強制力を発揮しない方が本質的な解決へ進むことが多い。教師の指導が子どもたちの中に結果的に敵対的な分断の構図を作り上げていないか検証する必要がある。

それよりもここでの自治の萌芽を育てるものはなになのかを検証する必要がある。

それは「自分の脳は自分でできた。みんな鍛える」の「自分の脳は自分で鍛える」の実感だ。この実感こそが大事で、競争的なものは排除しなければマイナスの効果しか生まれない。自分の脳を自分で鍛えている仲間がいることの実感だ。だから立ち歩いている子は立ち歩いても自分の脳を自分で鍛える仲間がいることが実感できればいいのだ。私はこのような時、1000マスを一時的に停止してその子とその周辺の何人かに基本足し算の指導を行ってから再度1000マスに取り組んだ。みんなができるようになってから再度取り組むと教室が急に明るくなった。

子どもたちの親身のアドバイスを教師が受け入れることは、コモンとしてのクラスを子どもに意識させていくことにつながる。ステップ1は「ともに鍛える仲間がいる」という自覚と自分の意見が教師に受け入れられ、手直しが行われる「私のクラス、僕のクラスという実感」が自治の萌芽を自分と仲間のレベルからクラスというレベルへ引きあがるものだと言える。

ステップ1からはじまってクラス全体が少しずつ変わっていくが、ステップ1という低いレベルの時にでも、子どもの中に自治の萌芽が育ちつつある子もいるし、学力はついてきたが自治の萌芽がまだ芽生えない子もいる。教師がそれを見極める能力がないと自治の萌芽を育てていくことはできない。授業の中、発言を聞いてほしい。弱い子のためと浮いた抽象的正義を述べているのか。クラスの一員として地についた発言なのか。自分も友達も育とうとする発言なのか。子どもの行動そのものの変化し、自治の萌芽が育とうとしているのか。まずは、教師が子どもたちの中に自治の萌芽を見つけられるかが問われている。

4月特活において自治活動の「さかのぼり」指導をしてほしい。4月に、1年間を見通して、自治的な取り組みのさかのぼりをやってほしい。1年2年では1年間でやることを例えば5年生なら2週間で分らせる。1、2週間で次へどんどん進む。

学力研は授業、特活、読み書き計算すべての教科、すべての分野を実践の舞台としている。だから、『統一の場』というものが無いと崩壊してしまう。クラス実践も同じだ。『統一の場』がないと分解してしまいいキラキラとした輝きを失う。

私が今、学力研に提案したいのは『統一の場』としての「授業自治」と「コモンとしての学級づくり」であると言える。

第四回「先生のための学校」の報告

大阪 吉田雅直

講座①「書くことが楽しくなる魔法の言葉」
～意欲を高める一言の価値を意識した指導～

福島 尚 先生

子どもが書いた文章につける「○の価値」
についてのお話が印象的でした。一年生の指
導を例に、はじめは「書けたこと自体」を評
価するが、少しずつ、評価規準を明確にして
いくことで、育てたい力を引き出していく。
しかも、それを子どもたち自身に考えさせ
るといふ指導が、同じ一年生を担任するも
のとして、大いに考えさせられました。

「ふりかえり」もただ書かせるだけでなく、
ポイントを明確に示し、「読み読みタイム」で
共有することで、子どもたちの書く力がど
んと進化したいく様子がしっかりと伝わり、
まさに「書くこと」を通して「模倣と共同」の
実践が行われていることを強く感じました。
評価は具体的に、しかし、子どもたちに「差

を感じさせない、という細やかさも心に残り
ました。「個の成長を学級の成長につなげ
る」という視点と、「教師や仲間の一言がお
互いを成長させる」という信念が、子どもた
ちを豊かにつなげ、確かな学力につながって
いることを感じさせる実践報告でした。

講座②「体育科の授業で子どもを育てる」

～学びのプロセスの転換・生涯スポーツの実現に向けて～

丸小野 聡暢 先生

「技能教科」と言われる体育の目標を「友だ
ちとスポーツを楽しむための技能を育てる」
ととらえ直すことから、これまでの単元構成
の常識を覆す実践が印象的でした。ドリルの
な反復練習で知識・技能を教えるからゲー
ムの中で思考・判断・表現を評価するという
従来の単元構成に対し、一時間目からゲーム
に取り組むことで、思考・対話をツールとし
て技能習得を目指すという発想は斬新なが

ら説得力があり、「早くゲームで実践した
い」という子どもたちの思いにも合致したも
のだと思いました。ルールもみんなが楽しめ
るものをみんなで話し合って決めていく様
子が具体的にわかり、参考になりました。子
どもたちはスキルをもっているが、コミュニケ
ーション能力の弱さがその表出を妨げている
という指摘にも深く考えさせられるものが
ありました。授業の動画も豊富で、バレーボ
ール型でありながら低く設定したネットや
ワンバンありルールの効果、子どもたちの動
きの変化などが具体的にわかり、すぐに実践
したくなる説得力のある実践報告でした。

講座③「しあわせな学級づくり」

～みんなで「できた」を増やす学級づくり～

李 詩愛 先生

学年目標は学年団でしっかりと共有する。
そして柔軟性を持たせることで子どもたち
ひとりひとりのものにするというこだわり
が印象的でした。「たよりになるのはおとな
りさん」の実践、「ノート指導」へのこだわり
「視写」や「連絡帳」を大切にされていること
など、書くことへのこだわりが伝わる実践報

告でした。初発の感想では、疑問だけでなく、それに対する自分の考えも書かせること、子どもたちが「書きたくなる」発問を設定すること、「題名ふりかえり」で要約する力を育てること、板書で子どもの思考をつなぐ工夫など、あらゆる手段で子どもたちの書く力を伸ばそうとする熱意が伝わってきました。最後に「一つの花」のコスモスをお父さんの「形見」と表現した子の発言から子どもたちが豊かにつながっていったという実践は、まさに「共有財産」としての学級を実現されていると感じました。

講座④ 久保校長のお話

「書くこと」は「自己再生能力」であり、タブレットに頼りすぎると書けない子が出てくる。書くことには忍耐が必要であり、それゆえ子どもを本質的に変える力を持つ。「模倣」と「共同」と「自学自習の力」の関係について。漢字ドリルで二十回書くことは「模倣」と言えるのか。漢字は正しい形・書き順・部首で覚えなないと再生可能な知識にはならない。一点一画を唱えて覚える「つぶやき書き」なら漢字を覚える孤独な作業を豊かな「共同」に

することができるとつぶやき書きの良さは、

- ① 正しい書き順で漢字を再生できる。
- ② 指書きすることで書かなくても覚える。
- ③ 音声言語化することで「共同」できる。

「模倣」の「質」の高さが、おとなりさんとの「共同」を可能にし、「自学自習の力」を育てる。このトライアングルを響き合わせることでできるかどうかは教師の力量にかかっている。書くことは読むことよりも難しい。よって共同の取り組みをするためには、同一の課題に向かって書かせること、「形」が必要である。同じ教材、同じテーマの中で個性を出し合うことで響き合いが生まれる。同じ教材文を読んで異なる意見を出し合うことで本質に近づく。課題を限定する能力・権利は教師にあるのであり、それが教材研究である。

参加者の感想より

・いつもふり返りを書けず終わることが多かったの、ふり返りを書いて、それを共有することがとても大事なんだなと思いました。「題名ふり返り」やってみたいと思いました。
・共同の楽しさ、大切さが分かりました。共同をいろいろな授業に上手に使い、学力と心の成

長を目指していきたいです。

・李さんの講座を聞いて、話すことだけでなく、書いたことをつながっていく、その過程が素晴らしいと思いました。たとえ「IC」であっても、継続することの大切さを再認識しました。

・〇の意味を考える。心に響きました。

・漢字の定着率が弱くてどのようにしたらよいのかと模索していました。漢字指導、早速実践してみます。ノート指導も勉強になりました。

・福島先生の「書きたくなるきっかけの〇のつけ方」や、仲間のひと言の大切さがよくわかりました。技能中心にならないための、丸小野先生のゲームからはじめる授業展開に納得しました。李先生のクラスのみながいるから学校が楽しくなる取り組みがとても理想的でした。久保先生の講話では、漢字も、孤独にせず文化にすることの大切さがわかりました。

・振り返りを大切に、児童への評価を励ましと達成感に変え、日々、丁寧に教材研究と児童の実態把握に努めたいと思いました。よりよい授業実践を通して、共有財産である学級を育てていきたいと思いました。

・友達からの意見や感想が自分の学習意欲を高め、励みになることがよく理解できました。

◇事務局だより 岡本 美穂

●第18期先生のための学校

●1月18日(土)

会場 (たかつガーデン)

会場費：1,000円

・講座1「できる、分かる つなぐ」
安心して子どもが「書きたい」
と思える授業のために

根無 信行

・講座2「教材解釈 授業実践」
学びをつなげる

社会科授業づくり
加藤 英介

・講座3「学級活動や学級会
など自治を育てる取り組み」

・講話 学校長 久保 齋

<https://www.kokuchipro.com/ev>

<ent/5713995felbc5a47dc91be44>

<d9ae92ff/>

●2月8日(土) オンライン

ZOOM 無料

<https://www.kokuchipro.com/ev>

<ent/9d77ae09ace6017c3ba57e87>

<66d4af4c/>

18年目を迎える「先生のための学校」です。18年続くには意味があります。ぜひ、ご参加ください。お待ちしております。

■冬の学習会開催決定!

対面講座です。残席わずかです。

12月22日(日) 定員:30名

午後13時開始

会場:たかつガーデン

参加費:2500円

テーマ

「教師であり続けるために」

教師になることよりも、教師であり続けることが難しい時代。

しかし、希望はあるはず。日々の子どもの関わりや学力づくり、学級づくりのこと、また働き方や保護者とのやりとりなど、様々なことを考え、ちよつとした「勇氣」「励まし」「指標」が見えてくる会です。参加者の皆さんと作っていく「冬のフォーラム」です。

13:00～あいさつ

13:05～教師の力量形成

14:10～教師教育の復権

15:15～現在の教育への提言

とおせっかいかにも考えてしまうこととがあります。

今回、弥刀小学校で、びっくりしたこと。国語って、課題のある子にとつては、けっこう難しい教科であるにも関わらず、どのクラスでもちゃんと参加できていることでした。授業者の年齢層に関係なく、どのクラスも同様でした。(いけないことと思いつつ、全クラスを参観してしまいました。)

帰りの電車の中で、どうしてそうなったのかを考えました。そして得た私なりの結論。入学時から、読み書き計算などの学力の基礎を徹底して鍛え上げられたからなのではないかと。

単年度で、自分のクラスで、そういうことはあります。でも、学校全体でというのは、これまでにあまり見たことがなかったもので、驚いてしまいました。あらためて読み書き計算という基礎を鍛えることの重要性を痛感し、勇気をもたうことができました。

◇学力研最新情報 ●「読み・書き・計算」を 徹底することの可能性

先日、弥刀小学校の公開発表会に参加しました。各学年1クラスずつの国語の公開でした。

でも、私の関心事は、課題のある子の学習の様子でした。あちこちの学校に行かせてもらっているすけれど、いつも注目しているのが、それです。

こだわりの強い子、文字に対する苦手意識のある子、数概念が確立しにくい子、いろいろなお子さんがいます。その子たちが、そのクラスでの学習活動にどう参加しているのか、指導者の支援がどうなっているのか、そればかりを参観しています。

支援担当教員が上手にフォローしているクラス、担任がわからないように支援をしているクラスなど、うまくいっているなと思う時と、このような指示では、子どもを戸惑わせてしまうだろうとか、こんな手立てをすればいいのに、

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2024年 12月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

12/

- 20 (金) 春日井学力研 18時半～ レディヤン春日井(JR勝川駅) 山口 080-6904-1697
21 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp
27 (金) 伊丹学力研 18時半～ ※阪急武庫之荘駅近く 前田 090-9715-3830

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

- みなみ学力研 9時半～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp
- いろえんぴつ (加印) 18時半～ 稲美町ふれあい交流館 岸本 090-9117-6330
- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

- 学力研・冬のフォーラム 12月22日(日) 13時～16時半

会場：たかつガーデン(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目より)
テーマ 「教師であり続けるために」 参加費2500円

- 学力研・先生のための学校【全6回】

8月25日(日) 13時半～16時【済】 9月14日(土) 13時半～16時【済】
10月12日(土) 13時半～16時【済】 11月9日(土) 13時半～16時【済】
2025年 1月18日(土) 13時半～16時 2月8日(土) 13時半～16時
対面講座：8月(エルおおさか)・10月・1月(たかつガーデン)

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

もうすぐ冬休みだね…とクラスの子どもと話していると「楽しみだけど、先生やみんなと会えないのはいやだなあ…」と言う子が何人もいました。そう思えるのは、とても幸せなことなのだと思います。(堀井)

ご意見・ご感想は下記まで

- 荒井 賢一 E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp
李 詩愛 E-mail iwamotoshie@gmail.com
堀井 克也 E-mail katsuya4k1h9@gmail.com